

「課題発見」から「未来創造」へ繋ぐDX

愛知産業大学三河高等学校・情報処理科・生徒 大木 葵翔

概要



データ×生成AIで未来を拓く～地域課題に挑む「街の謎解き探偵」と「世界観の設計士」プロジェクト

生成AIとの協働を通じて「問題解決能力」を段階的に習得することを目指すプログラムです。アプローチは3本の柱から構成されています。

- ①問題発見：RAIDAやRESAS等のビッグデータから「違和感」を言語化し、データに基づく「問い」を発見します。
- ②探求：生成AIを「思考のディレクター」として位置づけ、仮説立案と多角的な検証を繰り返す対話によって思考を深化させます。
- ③新たな価値の創造：ターゲット（ペルソナ）に刺さる世界観を設計し、WEBメディアを構築するというデジタル表現によって新たな価値を創造します。

これまでの取り組み紹介・現状と課題

■取り組みの例やポイントのご紹介

- 1、人と地域の課題解決に特化した株式会社JTBと、求人サイトと生成AIを展開するディップ株式会社が連携した、全12回のプログラムを実践します。
- 2、生成AIの特性理解・リスク管理に始まり、RAIDA、RESAS、地域幸福度等のビッグデータを活用し、データからおかしな点やチャンスを必ず1人1つ見つけ、言語化・共有します。
- 3、AIとのプレストを通じて課題の原因を仮説検証し、テーマを確定、ペルソナ設定、Slotそして生成AIを活用したライティングとWebデザインによるコンテンツ実装（自分の考えを形にする作業）を行います。
- 4、最終制作したそれぞれのWEBページを自分の言葉で発表することで、より課題に対しての主体性を育むことができます。

■現状と課題について

3つの課題

- ①自ら考えることの難しさ
 - ②思考のプロセスの可視化
 - ③適正な評価
- ①私たちはある程度のITスキルがある反面、AIを効率的に使いすぎて「作業の自動化」に逃げ、自らの思考が置き去りになる懸念があります。
 - ②完成したWEBページの美しさ以上に、講義DAY 2～3の葛藤の中でどれだけデータと向き合い、自分だけの独自の問い（違和感）を掘り下げ、そこをAIがどう助けたかという「思考のプロセス」を可視化する点です。
 - ③自らの成果をループリック指標に基づき適正に評価することが最大の課題です。データと向き合って独自の違和感を掘り下げる「葛藤」を重視して評価する仕組みが必要です。

まとめと今後の展望

DXハイスクール項目における重要なPOINTは、3つあります。（1）RAIDA・RESAS・地域幸福度等の「多角的なビッグデータ活用」（2）AIの役割を変化させる「生成AIの段階的・役割別活用」（3）企業の専門家（JTB・dip等）による評価を取り入れた「実社会との接続と循環」の3点です。

今後の展望として、私たちが「未来のプレゼンター」として

- ①自らの提案を地域への提言として言語化すること。
- ②グループ相互評価等を通じて他者の視点を取り入れながらコンテンツの「共感」を高めること。
- ③外部専門家からのフィードバックを糧に主体的に改善し続ける姿勢を重視した表現活動へと深化させることです。